

この台地後方の谷間は去る大戦において住民が集団自決をした場所である。米軍の上陸により追いつめられた住民は友軍を頼ってこの地に集結したが敵の砲爆は熾烈を極め遂に包囲され行く場を失い刻々と迫る危機を感じた住民は「生きて捕虜となり辱めを受けるより死して国に殉ずることが国民としての本分である」として昭和二十年三月二十八日祖国の勝利を念じて笑って死のうと悲壮な決意をした。兼ねてから防衛隊員が所持していた手榴弾二個づつが唯一の頼りで親族縁故が車座になり一ヶの手榴弾に二、三十名が集った瞬間不気味な炸裂音は谷間にこだまし清水の流れは寸時にして血の流れと化し老若男女三一五名の尊い命が失われ悲惨な死を遂げた。

昭和二十六年三月この大戦で犠牲になった方々の慰霊のためこの地に白玉の塔を建立したが周辺地域が米軍基地となつた為に移設を余儀なくされた。時移り世変わつてここに沖縄の祖国復帰二十年の節目を迎えるに当り過去を省み戦争の悲惨を永く後世に伝え恒久平和の誓いを新たにすするためここを聖地として整備し碑を建立した。

平成五年三月二十八日

渡嘉敷村